

令和 6 年度佐世保市『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』アンケート調査に関する報告書

門田 理世 (西南学院大学大学院)

中ノ子 寿子(西南学院大学大学院生・尚絅大学短期大学部)

増田 吹子 (西南学院大学大学院生・尚絅大学)

土田 珠紀(西南学院早緑子供の園)

江田 菜穂子(西南学院大学大学院生)

佐世保市幼児教育センター

調査結果概要【本文中の参照箇所】

1. 赤ちゃんの保護者は事業に対して高い満足感をもっており、事業での経験に多様な意義・価値を見出している

- 『赤ちゃん事業』に参加した保護者のほぼ全員が、事業に対して満足感を持っている。また、赤ちゃんの保護者は、わが子にとっても地域の小学生にとっても、事業での交流は価値があることだと認識していた。【p.4】
- 『赤ちゃん事業』に参加した保護者の 94.1%が「またこの事業に参加したい」と回答した。そう考える理由の分析から、赤ちゃんの保護者がこの事業の希少性や良さを感じていること、小学生との交流を保護者自身が楽しんでいること、わが子が小学生になった時のロールモデルを得ていること、小学生の学びに貢献したいと思っていること等、事業に対する多様な意義・価値を感じていることが明らかとなった。【p.4-6】

2. 小学生の“赤ちゃん”や“子育て”に対するイメージは、赤ちゃんやその保護者との交流をきっかけに変化している

- 小学生は、『赤ちゃん事業』に参加する前後で“赤ちゃんと聞いて思い浮かべるイメージ”を回答する際の語彙数が増えていた。また、事業に参加する前の小学生は、赤ちゃんを未熟で能力が足りない存在として捉えていたが、赤ちゃんとふれあった後にはそのようなイメージが薄れることが明らかとなった。【p.6-7】
- 事業の後に小学生が“赤ちゃんと聞いて思い浮かべるイメージ”の語を分析すると、赤ちゃんの匂い、重み、あたたかさや柔らかさを想起した語が増加していた。このことから、赤ちゃんとふれあう事業での経験が、小学生の中の赤ちゃんという存在に対する印象・イメージを変えるきっかけとなっていること、赤ちゃんが重みをもった命であることを実感として味わう機会となっていることが示された。【p.7-8】
- 小学生に“子育てのイメージ”について尋ねると、事業に参加する前も後も共通して「大変」という語が最も多く抽出された。ただし、事業に参加する前後で何に「大変」なイメージをもつかは変化しており、事業の後には「夜泣き」が「大変」という言及が増えていた。このことから、事業で赤ちゃんとふれあったり、保護者から話を聞いたりという経験を通して、小学生の中で子育てのイメージが具体的になっていることがわかった。【p.8-9】
- 子育てのイメージが「大変」であることは5年生・6年生共通の印象であるが、6年生では時間的な側面や経済的な側面から子育てを捉えていた。このことは、同じ経験をして年齢によって受け止め方や認識が異なる可能性を示唆している。【p.10】

調査結果より得られた佐世保市への提言【本文中の参照箇所】

1. 事業の継続と拡大

- 事業のよさを感じた赤ちゃんの保護者から、事業の継続と拡大を望む声が多く寄せられている。中には、「この事業を佐世保市全域に広げて、他市のモデルとなってほしい」のように、赤ちゃんとその保護者、地域の小学生が出会う場の価値と意義を佐世保市が他市へ発信する役割を担って欲しい、という記述もあった。さらに、事業に対する具体的な要望(例:事業の後に保護者同士の交流の場を設けてほしい、事業に参加できる子どもの年齢を広げてほしい等)も複数あがっている。今後佐世保市においては、このような市民の声の高まりを受け、これまでの調査研究成果を基にした更なる事業の展開と、事業成果の発信が望まれる。【p.4】

2. 事業展開に伴う調査事業の継続と研究成果の活用

- 今年度は、本事業から派生した『赤ちゃんフォーラム～赤ちゃんがつなぐ佐世保の子育て～』と題した市民向けのシンポジウムを開催した。このシンポジウムに象徴されるように、平成27年度より継続してきた『赤ちゃん事業』の意義と価値が、徐々に市民に浸透しつつある。佐世保市においては、今後も調査研究を継続し、その研究成果を教育や子育て支援等の政策に活かしていく循環が求められる。【p.11】

I. はじめに

佐世保市は平成27年度より、佐世保市幼児教育センターにおいて『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』(以下、『赤ちゃん事業』)を実施している。本事業は子育て支援啓発事業の一環として、参加する保護者が①親としての喜びを感じる、②自分の子育てを振り返る、③自分の子どもの成長や将来をイメージする、④小学生と関わることで地域の一員としての存在を意識することを目的とする。また、参加する小学校の児童(以下、小学生)にとっては①命の大切さ・尊さ・不思議さ、②相手を思いやる気持ち、③自分の家族(親)との関係を考えるきっかけ、④親の思いを知る、⑤将来の子育てを体験する機会となることを期待している。佐世保市教育委員会は、毎年6月を「いのちかがやく強調月間」と定めており、本事業はその取り組みにも寄与するものである。

本事業はこれまで佐世保市幼児教育センター近隣の限られた小学校区で開催されてきたが、西南学院大学大学院門田研究室(研究代表:門田理世)と佐世保市幼児教育センターの共同調査研究によって事業の効果と意義がデータから実証されてきたこと、事業に参加した保護者から、この事業の継続と拡大を要望する声が毎年挙がっていること、そして小学校や中学校から事業参加の申し出が増加してきたこと等を受け、今後は佐世保市全域に事業を拡大していくこととなった。その事業拡大に伴い、『赤ちゃん事業』で交流をした小学生・赤ちゃん・赤ちゃんの保護者が約半年後に再度ふれあう『おおきくなったね』事業は昨年度までで終了することとなった。よって本年度は、『赤ちゃん事業』に参加した赤ちゃんの保護者と小学生、それぞれの立場から事業の意義を検証した結果を報告する。

II. 調査の概要と分析手法

以下、『赤ちゃん事業』の概要と調査・分析対象について記す。

1. 事業の概要と分析対象

今年度の『赤ちゃん事業』(以下、事業)は、6月に4回、11月に3回、合計7回行われた。まず、以下に参加者数の概要を述べる。事業への参加は、6月の赤ちゃんは延べ48名、赤ちゃんの保護者は延べ49名(夫婦での参加が1組)、小学生が124名で、11月の赤ちゃんは延べ34名、赤ちゃんの保護者は延べ36名(夫婦での参加が2組)、小学生は94名だった。よって、6月・11月の参加者の合計は赤ちゃんが延べ82名、赤ちゃんの保護者が延べ85名(内、延べ3組が夫婦で参加)、小学生が216名(5年生155名、6年生61名)となった(表1)。

赤ちゃんの保護者は、日頃から幼児教育センター内の子育て支援広場を利用して職員から事業への参加を打診された場合もあれば、他の支援センターから事業に関する紹介を受けて参加したり、事業に関する取り組み・報告書が載ったホームページを見て自分から参加を申し込んだりした場合もあり、事業への参加経緯は様々である。小学校は、今年度初めて港小学校から参加の希望があり、5校の参加となった。小学校の事業への参加経緯も多様で、過去事業に参加したことのある学校に幼児教育センターから連絡をして参加を呼び掛ける場合もあれば、小学校側から参加を希望して幼児教育センターに申し出がある場合もあった。

小学生は、事業で赤ちゃんやその保護者と交流をする前に、担任・養護教諭による講話や妊婦の方の体験談の紹介、赤ちゃん人形を使った抱っこ練習等の授業を通して、胎児期のことや、生後の成長発達、赤ちゃんといふれあう際に気を付けること等について事前学習をしている。

表1. 『赤ちゃん事業』の参加者概要

日時		参加者数	
		親子数	小学生数
赤ちゃん事業	6/18(火) 10:25~11:10	10組 (夫婦参加1組)	港小学校 5年1組(19名) 5年2組(20名)
	6/24(月) 9:40~10:25	12組	白南風小学校 5年生1組(25名)
	6/25(火) 9:40~10:25	14組	白南風小学校 5年2組(25名)
	6/26(水) 10:30~11:15	12組	木風小学校 6年生(33名)
	11/13(水) 10:20~11:05	11組	天神小学校 5年2組(33名)
	11/20(水) 10:20~11:05	10組	天神小学校 5年1組(33名)
	11/29(金) 9:45~10:30	13組	潮見小学校 6年生(28名)
		合計 82組	合計 216名

事業当日は、小学生5～8名と親子2～3組が1グループとなり、小学生が赤ちゃん(おおむね1か月～1歳2か月)の遊ぶ様子を観察しながら、保護者から子育てや赤ちゃんについての話を聞く形で交流が行われ、小学生が玩具で赤ちゃんをあやす、赤ちゃんを抱っこする、絵本を読み聞かせる等の場面もあった。また、本事業は佐世保市幼児教育センターが運営しており、交流ではセンター職員や地域ボランティアスタッフがファシリテーターとして小学生と保護者をつなぐ役割を担っている。

【分析対象】事業に参加した保護者、小学生に事業前後でアンケート調査を実施した(質問項目は本報告書末参照)。事業は、事業に参加し、かつ事前・事後アンケートが揃っている保護者85名(6月49名/11月36名)と小学生206名(6月118名/11月88名)のデータを分析の対象とする。なお、保護者は複数回事業に参加してアンケートを書いている場合がある。また、小学生のデータの中には支援学級の児童のデータも含まれる。

2. 分析の方法

アンケートの中で選択肢による回答は、それぞれの回答の数や全体に占める割合の算出をした。また、自由記述による回答は、意味内容ごとに区切ってコードを付し、抽象度がより高いコード・カテゴリに分類していく質的分析¹⁾と、テキストマイニングソフトKH Coder²⁾を用いた分析を行った。なお、アンケート本文の質問および選択肢を《 》、原文の回答を「 」で示している。

Ⅲ. 調査結果および考察

以下、『赤ちゃん事業』に参加した赤ちゃんの保護者・小学生の調査結果及び考察を記す。

1. アンケート回答者の属性

【保護者について】

『赤ちゃん事業』に参加した赤ちゃんの保護者は、20・30代が多かった(表2)。今年度の参加者は、77名が母親、3名が父親である(無回答5名)。参加した赤ちゃんは第1子が32名、第2子が35名、第3子15名、第4子2名で、全体の割合は図1のようになった。割合でみれば、今回参加した保護者の61.2%が兄弟姉妹の子育て経験があり、37.6%が初めての子育て中ということになる。

《日頃、小学生とふれあう機会があるか》という問いに対し、《ある》と回答した人が33名、《ない》と回答した人が52名で、半数以上の保護者が普段小学生とふれあうことがない生活を送っている。さらに、《子育てに対する不安や気になっていること》は、《ある》が6名、《少しある》が25名で、31名の保護者が育児への不安を抱えていた。この内、15名(不安を感じている親の48.4%)が第一子の赤ちゃんを現在育てており、具体的な不安の内容は、離乳食の進め方や子どもの成長・発達に関するもの等があった。中には、「第1子なので、これからどんな風に成長していき、親としてどのように関わっていけばよいかと少し不安に感じます」等、はじめての子育てゆえにわが子の成長が見通せず、子どもへの関わり方が不安という声も2件寄せられていた。

表2. 『赤ちゃん事業』に参加した保護者の年齢(延べ数)

保護者の年齢	人数
20代	35
30代	47
40代	3
合計	85

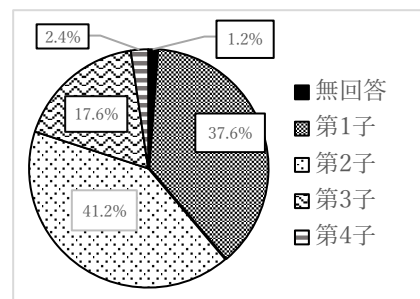


図1. 『赤ちゃん事業』に参加した赤ちゃんの出生順位

【小学生について】

分析の対象は、『赤ちゃん事業』に参加し、かつ事業前と後のアンケートが揃っている小学生の回答とした。6月が118名(男児63名/女児52名/無回答2名/回答しない1名)で、11月は88名(男児41名/女児47名)、合計206名である。5年生と6年生の割合は、5年生が147名(6月85名/11月62名)、6年生が59名(6月33名/11月26名)で、約7割が5年生だった。

また、《これまでに赤ちゃんとはふれあう機会があったか》という問いに対して、6月の参加小学生は《ある》が94名(6月

参加者の79.7%)で、11月の《ある》は64名(11月参加者の72.7%)となり、約7～8割の小学生が事業以前に赤ちゃんとのふれあいを経験している。ただし、ふれあう対象との関係については、「自分のいもうとが赤ちゃんで毎日あやしたり、だっこなどしている」という日常的な関わりを持っている場合もあれば、「友だちの赤ちゃんに1回あったことがある」という非日常的な経験の場合もあり、関わりの頻度や経験している内容には違いがあった。

2. 保護者アンケートの結果及び考察

(1) 保護者の事業に対する高い満足感と今後の展望への期待

『赤ちゃん事業』に参加した保護者に対して、事業の後に、《ご自身にとって事業に参加したことはよかったと思うか》を尋ねたところ、回答を得られた延べ85名中81名が《よかった》、4名が《まあまあよかった》と回答した。また、《ご自身の赤ちゃんにとって小学生とふれあうことはよいことだと思うか》を尋ねたところ、84名が《よいこと》、1名が《まあまあよいこと》と回答し、《小学生にとって赤ちゃんとのふれあうことはよいことだと思うか》を尋ねたところ、82名が《よいこと》、2名が《まあまあよいこと》と回答した(回答不備1名)。このことから、事業に参加した保護者のほぼ全員が、自分自身にとって事業への参加がよい経験になったと満足感を持っており、わが子にとっても地域の小学生にとってもお互いに交流をもつことはよいことであると価値づけていることがわかる。

事業に参加した保護者の回答には、「事業後希望者だけの母交流会をしてみたい」「年2回でなく、もう少し増やして欲しい」「今度は1～2才とかもしてほしい。就園児OKだとさらにたすかる」等、事業に対する意見・要望があがっており、事業の良さを感じたからこそ、今後継続して参加することを想定した具体的な声を寄せていることがうかがえる。

さらに、《この事業を佐世保市全域に広げていった方がよいと思うか》と尋ねた質問に対し、80名(94.1%)が《広げてほしい》と回答しており(無回答4名、どちらともいえない1名)、そう考える理由として「一部の地域だけだともったいないと思うくらい良い時間だと思いました」「とてもよい取り組みだと思うので佐世保市全域に広げて他市が真似するようにモデルとなってほしい」という事業の良さを理解したからこそ、このような取り組みを市内全域に広げてほしいと希求する思いが綴られていた。

佐世保市においては、このような市民の声の高まりを受けて、市内全域での赤ちゃんとその保護者、小学生や中学生がふれあう機会の保障が急務である。

(2) 保護者がこの事業にまた参加したいと思う理由

『赤ちゃん事業』の特徴の1つに、一度事業を経験した保護者が、継続して何度も事業に参加をすることがあるというリピート率の高さがある。《事業の参加回数》を尋ねる質問に対し、はじめての参加と答えた保護者は49名、2回目以上の参加が34名(無回答2名)で、延べ85名の参加者の内40.0%が事業を経験した上で再度参加を希望した保護者である。参加回数を尋ねたところ、最大で5回目の参加という保護者もいた。赤ちゃんを育てる保護者が何度も赤ちゃんを連れてその場に足を運ぶ理由の中には、保護者が感じている事業の意義や良さ、参加することで得られる何らかのメリットへの意識が込められていると推察される。したがって、赤ちゃんの保護者が事業の効果や意義をどこに感じているのかを検証するために、《この事業にまた参加したいと思うか》と尋ねた質問への回答に着目して分析を行う。

ここでは自由記述に込められた回答者の意識を明らかにするために、質的分析の手法を用いる。なお、一つの回答に複数の意味単位が含まれる場合は、記述に込められた回答者の思いを可能な限り汲み取るため、複数のオープン・コードを生成した。以下、オープン・コードを< >、焦点コードを[]、カテゴリを【 】、回答の件数やコードの事例数を表中の()で表す。

《この事業にまた参加したいと思うか》という質問に対し、《参加したい》と回答したのは64名、《まあまあ参加したい》という回答をしたのは16名で、参加者の9割以上となる80名が、機会があれば今後も事業に参加したいと希望している。事業に参加をしたいと思う理由を書いた自由記述を分析したところ、36のオープン・コード、18の焦点コード、7のカテゴリに分類された(表3)。

表 3.保護者が『赤ちゃん事業』にまた参加をしたいと思う理由

※オープン・コードは一部抜粋

【カテゴリ】	【焦点コード】	<オープン・コード>
事業の良さ・希少性(23)	事業はよい経験・時間・機会になるから(14)	わが子や小学生にとってよい経験になるから(4) お互いにとってよい機会・時間だから(3)等
	事業での経験や時間は貴重だから(5)	普段できない貴重な経験・時間だから(5)
	よい事業だから(2)	いい事業だと思うから(2)
	事業で色々な経験ができるから(1)	色々な経験ができるから(1)
	事業は様々な人とふれあえるから(1)	いろいろな人とふれあえるから(1)
事業に参加して感じた 気持ちの高まりや 気分の好転(19)	事業に参加して楽しかったから(16)	楽しかったから(11) 小学生との交流が楽しかったから(3)等
	事業に参加して癒されたから(2)	みんなにとって癒しになる時間だったから(1) 癒されたから(1)
	事業に参加して気分転換になったから(1)	気分転換になるから(1)
事業を通して得られる わが子へのよい影響(12)	わが子に人とふれあう経験をさせたいから(6)	わが子にたくさんの人とふれあってほしいから(6)
	わが子にとってよい刺激になるから(5)	わが子にとってよい刺激になるから(4) わが子に人との交流から刺激を受けてほしいから(1)
	わが子にたくさんの経験をしてほしいから(1)	わが子がたくさんの経験をしてほしいから(1)
事業で得られる学び(7)	事業への参加から学びを得られるから(3)	自分の学びになったから(1) お互いの学びになるから(1)等
	小学生が学びを得られるから(2)	小学生が命の大切さを知れるから(1) 小学生が大人になった時に役に立つから(1)
	自分自身が考えなおすきっかけを得たから(2)	考え直すきっかけになったから(2)
事業を通した小学生や わが子への気づき(6)	小学生によりイメージ・印象を持ったから(4)	小学生に対してよいイメージが増えたから(1) 小学生がかわいかったから(1)等
	わが子の成長イメージを持てたから(2)	わが子が大きくなった時のイメージが持てたから(1) わが子の成長を感じられそうだから(1)
事業を通して得られる 自己有用感(2)	事業への参加で誰かの役に立てるから(2)	小学生の役に立てるから(1) 何か貢献したいから(1)
小学生との交流に 対する意欲(2)	もっと小学生のことを知りたいから(2)	もっと小学生と話したかったから(1) 小学生のことを知りたいから(1)

まず、赤ちゃんの保護者がまたこの事業に参加をしたいと思う理由として最も多かったのは、[わが子や小学生にとってよい経験になるから][普段できない貴重な経験・時間だから]等の回答に代表される【事業の良さ・希少性】に関する記述だった。前述のように、今回参加した保護者の半数以上が普段小学生とふれあうことがない。このことから、きょうだい数や地域での自然発生的な交流が減少した現代において赤ちゃんを育てる保護者は、小学生との交流を行える『赤ちゃん事業』がわが子や地域の小学生にとってよい経験であり、希少な機会だと捉えていることがわかる。

次に多かったのは、【事業に参加して感じた気持ちの高まりや気分の好転】に関する回答である。特に、このカテゴリに含まれるオープン・コードの中の<楽しかったから>という回答は11件あり、全ての抽出されたオープン・コードの中で最多であった。このことから、保護者自身にとって事業への参加はまず自分自身にとって楽しい経験であったことがうかがえる。また、楽しさに加え、このカテゴリに含まれる回答から、事業での時間が癒されたり、気分転換になったりしている保護者もいることがわかった。このことは、事業が、子どもを育てる保護者にとってわが子と過ごす時間を楽しめる場所・癒されたり、気分転換ができたりするというような、肩の力を抜ける場所として作用していることが示唆している。

さらに、<小学生の役に立てるから>という回答があるように、保護者は【事業を通して得られる自己有用感】を持っている。<小学生が命の大切さを知れるから><小学生が大人になった時に役に立つから>という【事業で得られる学び】への言及と併せて考えると、保護者が、赤ちゃんと、赤ちゃんの親である自分との交流は小学生の学びになると認識しており、地域の小学生に赤ちゃんを育てる親として貢献できることがあると考えているからこそ、再度事業への参加を希望していることがうかがえる。つまり事業は保護者にとって、子育てをしている自分だからこそ、あるいは赤ちゃんであるわが子だからこそ、地域の小学生に支援できることがあるという自負を抱かせる効果があるといえる。

また、【事業を通して得られるわが子へのよい影響】のカテゴリに着目すると、ここでは特に＜わが子にたくさんの人とふれあってほしいから＞という回答が多い。事業での小学生とのふれあいを希少な経験だと捉える＜普段できない貴重な経験・時間だから＞という回答との関連から考えれば、わが子にたくさんの人とふれあう経験をしてほしいと願う保護者は、小学生と交流できる事業での経験を、日常的に得難い貴重な機会として認識していると推察される。

加えて、【事業を通した小学生やわが子への気づき】に関する回答をみると、保護者は事業を通して地域の小学生によるイメージを持つようになったり、小学生を通してわが子の成長イメージを得たりしていた。このカテゴリに含まれる回答を記述した6名中5名は、日頃小学生とふれあう機会は《ない》と回答している。赤ちゃんを育てる保護者にとって、わが子の育ちゆくイメージが明確になること、その育つ先にいる小学生のイメージがポジティブなものであることは、先が見えない子育ての不安を軽減する効果があると考えられる。したがって、自然発生的に地域でのつながりが生まれにくい現状において、赤ちゃんを育てる保護者のわが子にたくさんの人とふれあわせたいという願いを実現させ、いずれ成長していく小学生のイメージを形成する一助となる事業は、子育ての不安を払しょくできる可能性があるといえる。

3. 小学生アンケートの結果及び考察

(1) 小学生の赤ちゃんに対するイメージの変化

ここでは、赤ちゃんや赤ちゃんの保護者との交流が小学生に与える影響を明らかにするため、事業の前と後で、《赤ちゃんに聞いて思い浮かべる語》がどう変化したかを考察していく。

《赤ちゃんに聞いて思い浮かべる語》を尋ねて、回答欄を9個提示したところ、6月/11月の事業前と後でのイメージ語の集計は表4のようになった。6月も11月も事業の前と後を比較すると、事業後の方が小学生の回答する語の総数、平均回答数が増えている。これは、赤ちゃんや赤ちゃんの保護者とふれあうことで、小学生の中にある赤ちゃんを想起するイメージの語彙が量的に増加したことを示している。

表4.《赤ちゃんに聞いて思い浮かべる語》の集計

事業時期/人数	6月/118名		11月/88名	
アンケート実施時期	事前	事後	事前	事後
回答語の総数	672	720	547	589
最小回答数	1	2	1	1
最大回答数	12	14	9	9
平均回答数	5.7	6.1	6.2	6.7

次に、事業で赤ちゃんやふれあう実体験を経て、赤ちゃんをイメージする語が小学生の中でどのように変化したかをみていくため、事業前後のイメージ語を比較していく。今回はその分析のために、テキストマイニングソフトKH coder (Ver.3)を用いた。KH coderを用いた理由は、この分析ソフトがテキストデータを計量的手法によって解析し、データの全体像や概観を描くのに適しているからである。なお、KH coderによる分析の結果は、ソフトの設定によって切り出された語を〔〕で、本文を「」で、ソフトによって切り出された原文回答中の該当箇所を下線で示している。

まず、小学生が事業の前と後に《赤ちゃんに聞いて思い浮かべる語》として回答した言葉の頻出語を比較した(表5)。

表5からわかるように、赤ちゃんをイメージする語として多くあがる言葉は、事業前後を比較して1～5位まで共通している。ここから、小学生は事業を経験した後でも、赤ちゃんに対して〔かわいい〕〔小さい〕〔泣く〕等のイメージを不変的に持っていることがわかる。

次に、赤ちゃんやふれあう前にイメージ語として上位にあがっており、事業後には上位にあがってこない言葉として、事業前に出現回数57回、頻出順位7位の〔～ない〕という否定助動詞に着目する。これは、具体的には、「しゃべれない」「歩けない」「まだなにもできない」等、赤ちゃんの能力不足に関するイメージが集約された言葉である。この〔～ない〕は、赤ちゃんやふれあった後では15件に激減している。このことが

表5.事業前後の赤ちゃんに対するイメージ上位10語

順位	事業前		事業後	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	かわいい	185	かわいい	189
2	小さい	151	小さい	134
3	泣く	126	泣く	132
4	ミルク	81	ミルク	65
5	よく	75	よく	63
6	～する	57	ハイハイ	53
7	～ない	57	笑う	44
8	ハイハイ	54	寝る	41
9	寝る	51	ぶにぶに	35
10	オムツ	41	～する	34

ら、赤ちゃんといふれあった小学生の中で、赤ちゃんが何かできない、未熟な存在であるイメージが薄れたことが示唆される。

一方、事業前にはそれほど赤ちゃんをイメージする語としてあがっていないが、事業後には多くあがるようになった語もある。事業後の頻出順位9位[ぶにぶに]である。赤ちゃんといふれあった後に出現したこの言葉は、赤ちゃんのやわらかさを表現するイメージ語だと推察され、同様に[むちむち]が15件、[もちもち]が14件みられる。これらはどれも赤ちゃんに直接会い、みたり、ふれたり、抱っこしたりしったりという体験を経て小学生が獲得した特徴的な語だと考えられる。ここから、事業前と後を比較して赤ちゃんのイメージとして用いられる特徴的な語を特定するために、対応分析(コレスポンデンス分析)を行った。対応分析は、特定の変数で出現パターンが似通った語を二次元の散布図で視覚的に示すことができるものである。事業前と事業後を変数として分析にかけたところ、図2のような散布図が得られた。なお、図2の中で太枠の四角で囲っている語は、考察に用いた語である。

図2は、中心にある原点から右上に配置されている語ほど事業前に特徴的な語であり、左下に配置されている語ほど事業後に特徴的な語だと解釈する。この図から、赤ちゃんといふれあった後に赤ちゃんをイメージする語として出現する最も特徴的な語は、「意外と重い」「重い」等の回答から成る[重い]と、「あたまいいいにおい」「ミルクのいいい」等の回答から成る[匂い]の2語である。さらに、[あたたかい]という語や[むちむち][ぶくぶく][ぶにぶに]という柔らかさを象徴するイメージが現れるようになるという特徴もみられる。赤ちゃんといふれあった後にこのようなイメージが出現したというのは、小学生が赤ちゃんとのふれあいから匂いや重さ、そしてあたたかさ、柔らかさの実感を得て、赤ちゃんに対する認識、イメージが変化したことを示している。

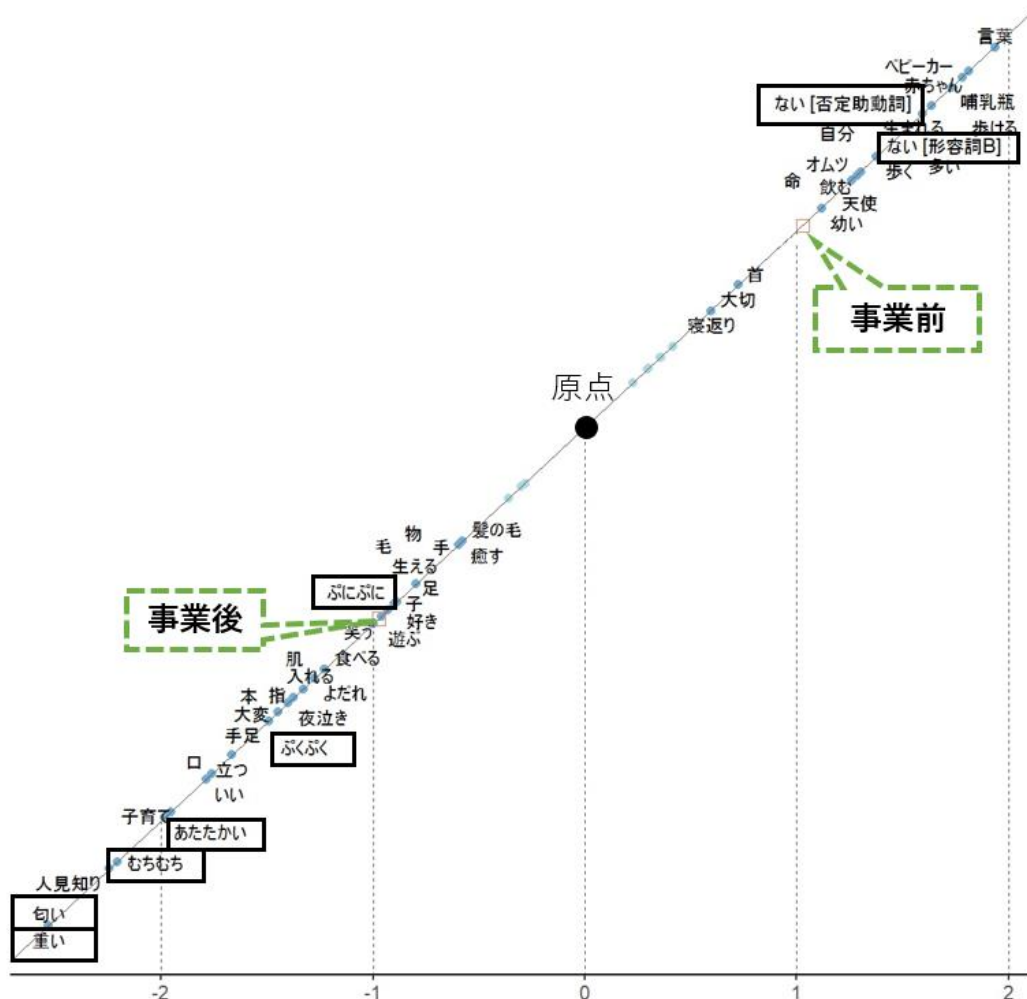


図2.小学生の赤ちゃんに対するイメージの事業前後の特徴語

また、図2右上の事業前では、「しゃべれない」「歩けない」等の「～ない(否定助動詞)」という語や、「歯がない」「筋肉がない」等の「～ない(形容詞)」という語が特徴的な語として抽出された。このような語は赤ちゃんの未熟さや能力的な未発達を象徴するイメージだと思われるが、前述のように、事業後にはそのイメージが赤ちゃんを表す言葉として上位にはあがらなくなっている。このことから、『赤ちゃん事業』での経験は、小学生の中の赤ちゃんを未熟な、足りない存在とみなすイメージを変化させ、生きている匂い、重み、あたたかさや柔らかさをもつ存在としての実感を得る効果があることが明らかとなった。赤ちゃんに対するイメージの変化は、小学生にとって赤ちゃんとのふれあいが命の大切さ・尊さ・重さに気付く機会となったことを示しており、『赤ちゃん事業』がその一義的な目的を果たしている証左といえるだろう。

(2) 子育てを「大変」と考える小学生がもつイメージ

『赤ちゃん事業』に参加した小学生216名(5年生155名、6年生61名)に、事業前と後に《子育てにどのようなイメージがあるか》について自由記述による回答を求めたところ、事業前205名(5年生147名、6年生58名)、事業後206名(5年生147名、6年生59名)から回答を得られた。まず、子育てに対する小学生の印象や認識の全体像を明らかにするために、KH coderを用いてどのような語が多く回答されていたかを確認する頻出語リストを作成した。表6・7は、頻出語リストの上位10までを抜粋して示したものである。

全てのグループで、最も多く抽出された語は「大変」であり、小学生は子育てを大変なものとして捉えていることがわかった。そこで、小学生がなぜ子育ては大変だというイメージをもっているのか、子育ての何を大変だと考えているのかを明らかにするために、共起ネットワーク図を作成した。共起ネットワーク図は、同じ文書の中で一緒に使われている語を線で結んだネットワーク図であり、単語同士の関連性を視覚的に表現したものである。円の大きさは語の出現頻度の高さを、図中の語と語をつなぐ線は、その語が共起関係にある(文中で一緒に用いられている)ことを示している。なお、表6・7において最頻出語である「大変」及び「大変」と共起関係にある語に太枠と網掛けをつけている。

5年生の共起ネットワーク図では、「大変」と共起関係にある語は、事業前では「楽しい」「ご飯」「オムツ」「ミルク」「イメージ」「家事」(図3)、事業後では「夜泣き」「泣く」「思う」「赤ちゃん」「イメージ」が挙げられている。(図4)。6年生で「大変」と共起関係にある語は、事業前「楽しい」「子育て」「大人」「思う」「成長」「言う」「子ども」「お金」「時間」(図5)、事業後「楽しい」「イメージ」「子育て」「毎日」「成長」「子ども」「感じる」「赤ちゃん」「夜泣き」「泣く」であった。(図6)。

5年生の事業前、6年生の事業前・事業後に「大変」と共起関係にある言葉として「楽しい」が挙がっている。このことから、小学生は子育てが大変なものであるというイメージをもっているが、ただ大変だけでなく、大変さの中に楽しさがあるものだと考えている

表6. 事業前後の子育てに関するイメージ【5年生】

事業前		事業後	
抽出語	出現頻度	抽出語	出現頻度
大変	101	大変	106
する	31	する	47
オムツ	19	ない	23
ミルク	16	夜泣き	22
ごはん	15	赤ちゃん	18
赤ちゃん	13	思う	17
イメージ	12	ある	16
楽しい	11	イメージ	15
かえる	10	ミルク	14
ない	10	むずかしい	13
ねかせる	10		
むずかしい	10		
泣く	10		

表7. 事業前後の子育てに関するイメージ【6年生】

事業前		事業後	
抽出語	出現頻度	抽出語	出現頻度
大変	46	大変	51
する	13	する	21
楽しい	8	ある	13
ある	7	イメージ	11
ない	5	子育て	9
なる	5	ない	7
イメージ	5	赤ちゃん	7
とても	4	楽しい	6
むずかしい	4	夜泣き	6
子ども	4	うれしい	5
思う	4	とても	5

ことがわかる。また、また、5・6年生に共通する特徴として、事業を経験した後には「大変」と「夜泣き」に共起関係がみられるようになっている。これは、赤ちゃん事業で赤ちゃんの保護者の話を直に聞く体験を通して、子育てをする中で実際に大変なことを知る機会を得て、子育てのイメージが具体的になっていることの証左であると考えられる。

事業前に比べて事業後では「子育ては大変」というイメージが若干増えている(表6・7)が、これまでに述べてきたことから、これは赤ちゃん事業を通して子育てのイメージが悪くなっている、もしくは変化していないということではなく、それまでもっていた限られた知識の中で抱いていた子育てのイメージから、実際に赤ちゃんとふれあい、保護者の話を聞くことによって子育ての実際のあり方を知ったことで生じたイメージの変化であるといえる。また、子育てのイメージは日常生活における経験、学校での学びの蓄積や子育てを取り巻く現状を認知する能力の発達等、複数の要因が絡み合って変化すると考えられる。一方で、『赤ちゃん事業』のような場で赤ちゃんとふれあう機会を得ることで、このような自然に生活する中での変化を超えて、子育てのイメージが具体的で、より実際に近いものになると考えられ、これは赤ちゃん事業の意義を示すものである。

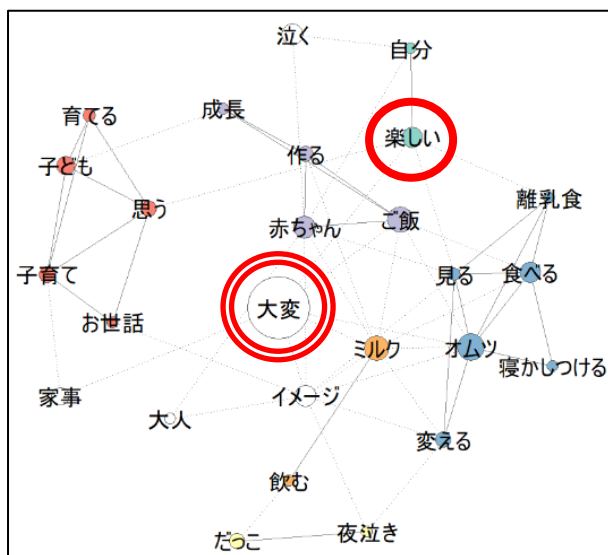


図3.【5年生 事業前】子育てのイメージ

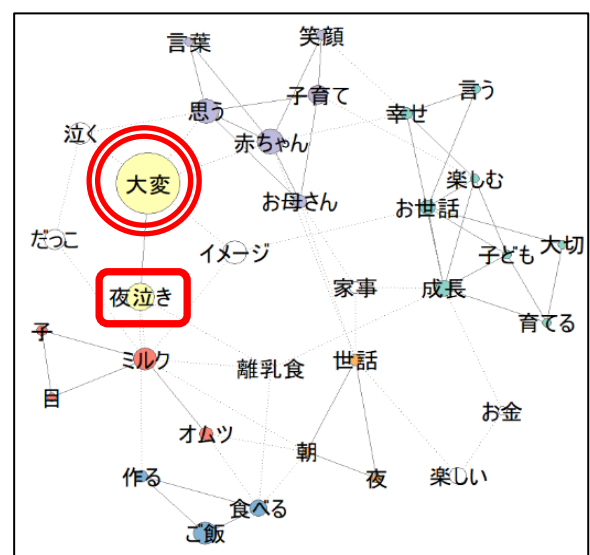


図4.【5年生 事業後】子育てのイメージ

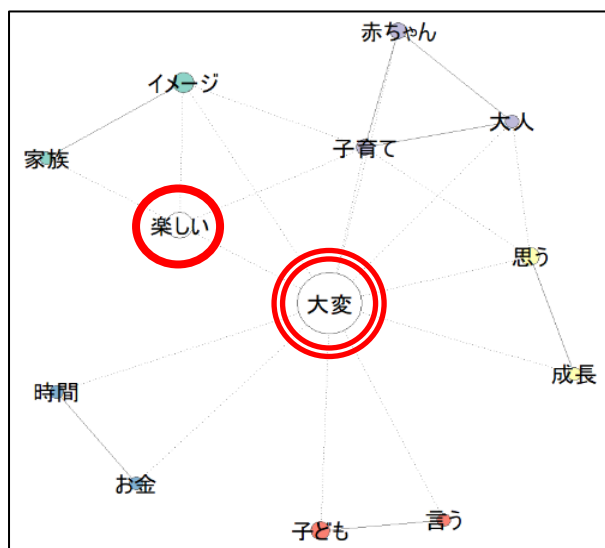


図5.【6年生 事業前】子育てのイメージ

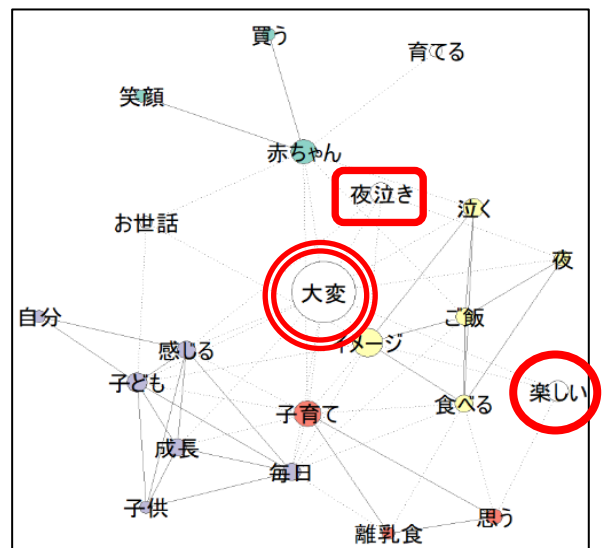


図6.【6年生 事業後】子育てのイメージ

(3) 子育てのイメージに関する学年毎の特徴

子育てのイメージに関する学年毎の特徴を明らかにするため、アンケートに回答した小学生の学年と回答時期(5年生の事業前・5年生の事業後・6年生の事業前・6年生の事業後)を外部変数として共起ネットワーク図を作成した(図7)。この図から「お世話」「だっこ」「ミルク」「家事」「オムツ」「変える」「作る」は5年生のみと共起関係にあり、「時間」「大人」「言う」「お金」は6年生のみと共起関係にあることがわかる。6年生と共起関係にある「時間」「お金」「自分」は「お金や時間がかかる」「自分の時間がなくなって、少し大変」「自分の好きなことができない」「大変だけど自分の子どもが育っていくのが感じられる」といった文の中に、「毎日」は「毎日毎日大変なイメージ」「毎日、子どもの時間に合わせて生活するのでとても大変なことだけど、日々子どもの成長を感じられる」といった文の中で使われている。このことから、5年生は、子育てを主にミルクを与えたり、オムツを変えたりする等、赤ちゃんの世話をするところであると捉えているのに対して、6年生は、自分の生活が変わることやお金がかかること等の大変さがあることを認識していることがうかがえる。これは、赤ちゃん事業の経験の有無によって生じた差異ではないため、5年生から6年生になるまでの間に授業等で知識や経験を得ていること、知的発達に伴って抽象的な思考が可能になったこと、様々な側面から物事を考えられるようになったこと等から生じた変化であると捉えられる。

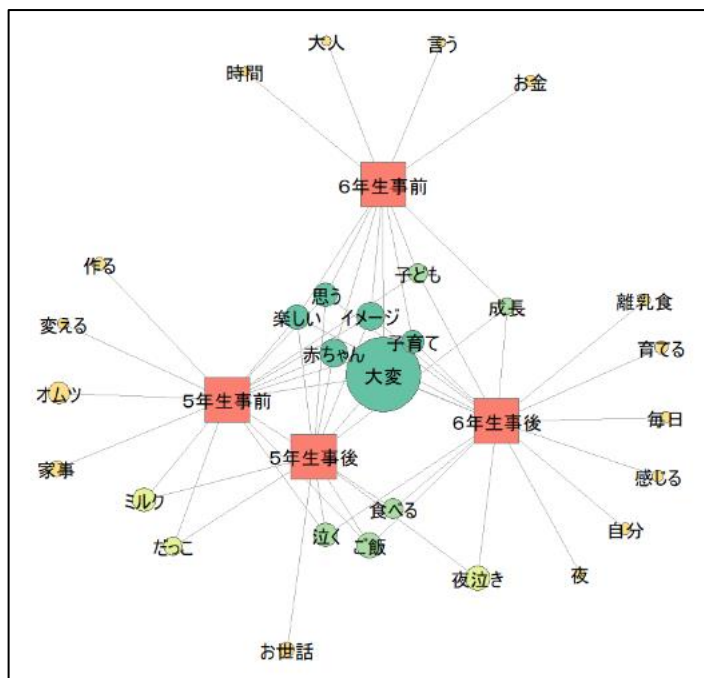


図7. 【5・6年生 事業前後】子育てのイメージ

IV. まとめと今後の課題

まず、『赤ちゃん事業』に参加した保護者のアンケート分析について結果をまとめる。事業に参加した保護者はほぼ全員が事業に参加して満足感を得ており、事業は自分自身・自分の赤ちゃん・地域の小学生の三者それぞれにとってよい経験になる貴重な時間だと認識している。また、自分の子どもにたくさんの人とふれあってほしいと願う保護者にとって、事業は地域の小学生とわが子を安心して交流させられる場を提供するという意義も有していた。さらに、保護者が事業に継続して参加したいと思う理由には、事業での小学生との交流を自分自身が楽しんでおり、気分転換になっていることや、わが子が小学生になった時のロールモデルを得られること等、保護者が事業に対し、多様な価値を認識していることが明らかとなった。以上のことから、赤ちゃんを育てる保護者にとって『赤ちゃん事業』は何度も足を運びたい楽しい時間・意義のある場となっており、子育て支援の一環としてこのような場を継続的に提供していく必要性が示された。

次に、小学生にとって事業で赤ちゃんや赤ちゃんの保護者と交流することがどのような意味をもつのかについて分析をした結果をまとめる。事業に参加する前と後で赤ちゃんをイメージする語の変化を比較したところ、事業の後には赤ちゃんを表現する語彙が量的に増加し、質的に変化していることが明らかとなった。具体的には、事業の前の小学生は赤ちゃんを未熟で能力が足りない存在として捉えていたが、赤ちゃんといふれあった後にはそのようなイメージは薄れていた。そして、赤ちゃんといふれあった後には赤ちゃんの匂い、重み、あたたかさや柔らかさに関するイメージの語が増えていたことから、赤ちゃんといふれあう経験が、小学生の中の赤ちゃんという存在に対する印象・イメージを変えるきっかけとなったことが示された。また、事業の前後に子育てのイメージについて尋ねた質問への回答で、事業後には「大変」なこととして「夜泣き」に対する言及が増える等、事業前後で何が大変かというイメージが変化しており、事業で赤ちゃんといふれあったり、保護者

から話を聞いたりという経験を通して、小学生の中で子育てのイメージが具体的に変わったことがうかがえる。

以上の結果から、小学生にとって赤ちゃんふれあう経験は、自分自身が親になるかどうかの選択だけに影響する問題ではなく、自分自身と同じように赤ちゃんも生きていること、重さをもった命であることを実感として味わう機会であり、子育ての実際を知る場として価値がある。つまり、赤ちゃんを好きか、嫌いか、子育てをするか、しないかに関わらず、同じ社会で生きる一員として赤ちゃんの存在を認識するためにも、学校教育の一環として広く小学生に赤ちゃんふれあう経験を保障することが肝要だと考えられる。加えて、子育てのイメージが「大変」であることは5年生・6年生共通の印象であるが、6年生では時間的な側面や経済的な側面から子育てを捉えていたことも興味深い。同じ経験をして年齢によって受け止め方や認識が異なるのか、子育てに対するイメージが何を要因として形成されているのかは今後継続して検討していきたい。

今年度はこれまでの『赤ちゃんふれあい事業』の事業内容と成果を広く周知し、子どもが健やかに成長できる佐世保市を共に考える場として『赤ちゃんフォーラム～赤ちゃんがつなぐ佐世保の子育て～（開催日：令和6年度9月22日 於：アルカス佐世保）』と題した市民向けのシンポジウムが開催された。このフォーラムに代表されるように、赤ちゃん小学生、中学生の出会いの場を求める市民の声が高まっている。その気運の高まりを受け、今後『赤ちゃん事業』はこれまでの成果に基づいて佐世保市のより広域へ展開していくフェーズに入る。佐世保市においては、事業の展開とそれに伴う成果と課題を継続して調査し、その調査結果を教育や子育て支援等の政策に活かしていく循環がますます求められるだろう。

<参考文献>

- 1) 佐藤郁哉(2008)「質的データ分析法—原理・方法・実践」新曜社
- 2) 樋口耕一(2014)「社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して」ナカニシヤ出版

(資料) 6月・11月実施 『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』 アンケート項目

小学生事前アンケート		保護者事前アンケート	
問1	性別、きょうだいの数、自分はきょうだいの何番目か	問1	年齢、性別、赤ちゃんの月齢、きょうだいの数、第何子か
問2	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること	問2	小学生に対するイメージ(自由記述回答)
問3	「子育て」にどのようなイメージがあるか	問3	事業に参加した回数
問4	これまで赤ちゃんとのふれあいがあったか、ふれあった人はどのような時にどれくらいか	問4	小学生とふれあう機会があるか、ある場合は具体的にどのようなふれあう機会があったか。機会があった方は具体的にどのようなふれあいだったか
問5	赤ちゃんとのふれあいが楽しみか、その理由	問5	保護者自身が小学生や中学生の授業で、小学生未満の子どもとふれあうことがあったか、その内容とその時感じたこと
問6	赤ちゃんや保護者とふれあう時に心配なこと、気を付けたいことはあるか。あるとしたら具体的にどのようなことか	問6	事業に参加しようと思った動機
問7	赤ちゃんの保護者に聞いてみたいこと	問7	子育てをしていて嬉しい、楽しいと思うことはあるか、それはどのような時か
問8	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者と会ってしてみたいこと	問8	子育てに対する不安や気になることはあるか。不安がある場合はその内容を具体的に
		問9	子育てに関して誰かに相談することはあるか。ある場合は、誰に相談をするか。相談しない場合は、その理由は
小学生事後アンケート		保護者事後アンケート	
問1	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること	問1	小学生に対するイメージ(自由記述回答)
問2	「子育て」にどのようなイメージがあるか	問2	ご自身にとって、事業に参加してよかったか。また、そう思った理由
問3	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者と会って感じたこと	問3	赤ちゃんにとって、事業で小学生と交流することはよいことだと思うか。また、そう思う理由
問4	赤ちゃんの様子で気付いたこと(自由記述回答)	問4	小学生にとって、このような事業で赤ちゃんとのふれあうことはよいことか。また、そう思う理由
問5	赤ちゃんの様子を見られてよかったか。そう思う理由	問5	事業に参加して小学生に対するイメージの変化したところ、変化していないところ
問6	赤ちゃんをさわったり抱っこしたりしてふれあったか。ふれあった人は何をしたか、気づいたことはあるか。ふれあっていない人は、今後ふれあうとしたら何がしたいか	問6	事業に参加して小学生と交流したことで、何か自分自身に変化があったか。変化したと思う場合、それはどのようなところか
問7	赤ちゃんや赤ちゃんの保護者とかかわるときに気を付けたことがあるか	問7	この事業にまた参加したいか。また、そう思う理由は
問8	赤ちゃんの保護者と話した人は、話せてよかったか。また、そう思う理由。お話をしなかった人は今後赤ちゃんの保護者とお話をしてみたいか。また、そう思う理由	問8	このような事業を佐世保市全域に広げていった方がよいと思うかどうか。また、そう思う理由は
問9	今後も赤ちゃんや保護者とふれあう機会があれば参加したいと思うか。また、なぜそう思ったのか	問9	事業への要望・意見